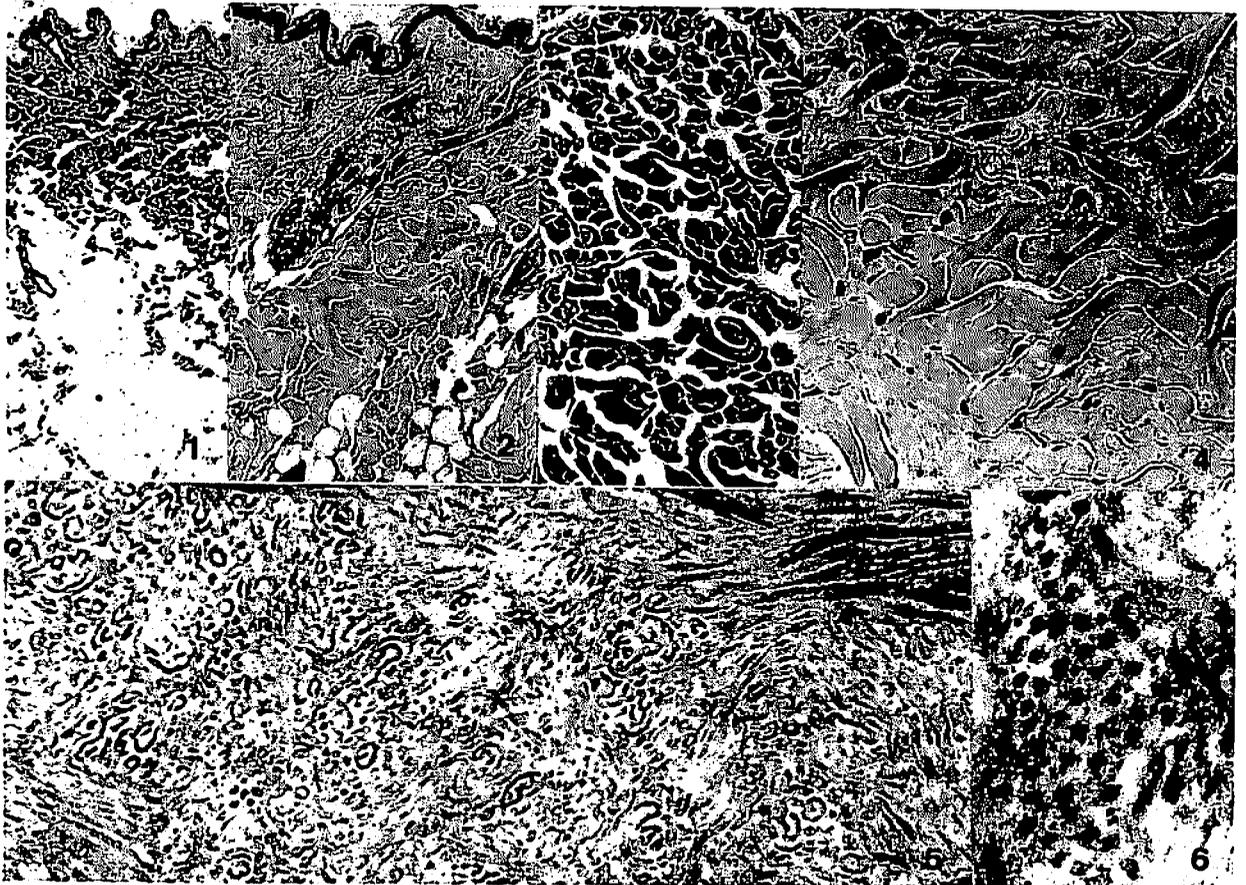


猫の皮膚無力症 (Cutaneous Asthenia)

麻布大学獣医学部病理学第一講座出題 第28回獣医病理学研修会標本No.501



動物: 日本猫, 雄, 約9ヵ月齢, 剖検時体重2.8kg。

臨床的事項: 推定年齢3ヵ月時に, 自分で掻いてできる傷の治りが悪いとのことで上診。前額部, 耳根~頸部にかけて脱毛し, 裂傷, 痂皮形成, ときに膿汁を排出。種々の治療を試みたが効果なく, 病勢悪化し, 約6ヵ月後に斃死した。

剖検所見: 全身皮膚に脱毛, 裂傷, 痂皮を伴う潰瘍, 癬痕が散在。皮膚は緊張感に乏しく, 脆弱で, 被毛を牽引しただけで皮膚が裂けた。前駆皮下および筋間には高度の気腫と出血が認められ, 胃, 十二指腸(2分の1), 脾臓(3分の1)と大網が脱出する高度の横隔膜ヘルニアと左肺前葉の完全離断がみられた。なお, 脾頭部は出血を伴い壊死していた。

組織学的所見: 皮膚の変化は, 程度に差はあったが, 鼻背~体幹~趾端に至る全身に見られた。正常猫の皮膚(Figs.1,3)と比較すると本例の皮膚(Fig.2)は著しく厚く, 表皮には著変はないが, 真皮の膠原線維が高度に膨化し, 線維束が不明瞭であった(Fig.4)。なお, Figs.1,2は40倍, Figs.3,4は160倍, いずれもH&E染色である。また, 膨化した膠原線維の染色性は, アルシアン青とトルイジン青

染色で増し, H&Eワンステップトリクロームとファンギーソン染色で低下し, 複屈折性は殆ど消失していた。このような変化は, 臓器の膠原線維にもみられた。

ホルマリン固定した真皮を電顕で観察した(Figs.5,6)。本来ならば, 交錯する線維束中に方向性をもち規則正しく配列する細線維が観察されるはずであるが, 本例の細線維は, 細かくカールし, 全く線維束を形成していなかった。ときに線維束様の配列が認められたが(矢印), 細線維はゆるやかに蛇行, 離開, 断裂がみられ(Fig.5, $\times 30,000$), 細線維の横断面は, 不整で, 直径30~60nmと正常より細かった(Fig.6, $\times 60,000$)。

診断: これらの所見から, 広範かつ高度な膠原線維の変状を主徴とする「猫の皮膚無力症」と診断された。

このような疾患は, 皮膚のfragilityとhyperextensibilityを特徴とするCongenital Dermal Astheniaとして, 牛と羊ではDermatosparaxis, 犬, ミンクと猫では, Cutaneous astheniaと呼ばれている(Jones and Hunt, 1983)。猫では, 常染色体による優性遺伝が疑われているが, 本例は捨て猫のため家族歴は不明であった。